

恋愛・友人関係観の性差に関する研究^{1),2)}

A study on the sex differences of the viewpoint of romantic and friendly relationships

水野 邦夫
(MIDZUNO, Kunio)

異性間の対人関係に友人関係と恋愛関係がある。これらはともに、相手に対する好意（「好きである」という感情）を基盤に置いているが、たとえば英語で 'like' と 'love' に区別されるように、両者には質的な違いがあるようであり（以後、友人関係における好意は「友情」、恋愛関係におけるそれは「恋愛」とそれぞれ記す）、これまで多くの研究者がその違いについて論じてきた。たとえば Berscheid & Walster (1974) は、1) 友情は現実報酬によって強化されるが、恋愛は将来的な架空報酬によっても強化される、2) 友情は時間的経過に対して安定しているが、恋愛は一時的な要素が強い、3) 友情は欲求が阻止されると衰退するが、恋愛は欲求阻止（苦悩など）によっても強められる、と両者の違いを指摘している。また Rubin (1970) は、友情が「相手を好ましい人物であると見なし、尊敬や信頼感を持ち、自己との間に類似性を認知した状態」であるのに対し、恋愛は「相手に対する身体的・情緒的要求と相手の幸福や要求に対する積極的援助と関与、互いの親密なコミュニケーション」から形成されるとしている。Davis (1985) は、恋愛は友情を構成する諸要素（尊敬、受容、理解、など）に情熱（魅惑、性的衝動、排他性）と世話（擁護、最大の援助）が加わったものであると捉えているが、同時に、恋愛はアンビバレントな感情を伴うと述べている。また Sternberg (1988) は、友情が親密性のみで構成されるのに対し、恋愛はそこに情熱（ロマンスや身体的魅力、性的関係などを導くもの）と決心／コミットメント（相手を愛しようとする決意／関与の意思）が加わったものであるという見方をしている。

1) 本研究は、情報社会学科第4期生の井上千穂さんの卒業研究データの一部を、筆者が別の観点から分析したものである。データ収集・管理をはじめ、若年層の恋愛観にいろいろとご示唆を戴いた井上さんに、厚く感謝の意を表します。

2) 本研究のデータの一部は、日本社会心理学会第43回大会（於 一橋大学）においてパネル発表された。

以上の諸説を総合すると、友情と恋愛の違いとして、1) 恋愛は友情よりも強い情動経験を有する（これについては、Dutton & Aron (1974) の「吊り橋」実験などからも推察されよう）、2) 恋愛は友情よりも脆弱で緊張した関係を築きやすい、3) 恋愛には相手への性的欲求や相手への積極的関与が伴う、ということが挙げられよう。

ところで、友人関係や恋愛関係の捉え方には、男女で大きな違いがみられるようである。まず友人関係の捉え方の違いについてみると、Rubin, Hill, Peplau, & Dunke-Schetter (1980) は、女子は男子よりも早い段階から自己の内面に関する自己開示をする傾向があると指摘している。また、Eder & Hallinan (1978) は、二者関係から三者関係への発展パターンについて調べ、男子は時間の経過とともに三者関係へと発展していくのに対し、女子は著しい発展を遂げず、むしろもとの二者関係に逆戻りすることを見出しており、さらに楠見 (1986) は、ソシオメトリックな方法で学級内の友人関係の構造を調べ、男子は小集団のメンバーどうしが何らかのつながりを持つのに対し、女子は集団ごとに孤立することを報告している。そのほかにも、Karweit & Hansell (1983) は、女子は男子よりも凝集性の高い友人関係を形成しやすいことを見出している。これらのことから、女子の友人関係は、とくに同性同士の関係において、男子のそれと比べて強い情緒性を基盤とした強い絆で構成されていることが窺えよう。

次に恋愛関係の捉え方の違いをみると、松井・木賊・立澤・大久保・大前・岡村・米田 (1990) は、Lee (1977) の恋愛理論に基づいて恋愛類型の男女差を調べ、男子は女子よりもアガペ（献身的な恋愛）を強く示すのに対し、女子は男子よりもルダス（遊びの恋愛）やプラグマ（実利的な恋愛）を強く示すという結果を得ている。このことは、男子の恋愛は相手中心に関係が形成されていくが、逆に女子は自分の利益を中心に恋愛関係を展開させていることが推察される。

以上、友情と恋愛の違いをみてきたが、それでは異性間の関係の中での友人の位置づけや恋人の位置づけは、男女でどのような違いがみられるのであ

ろうか。このような、友人関係と恋愛関係を総合した対人関係観については、まだそれほど多くの研究がなされていないようであるが、水野（2000）は友人関係と恋愛関係の捉え方に顕著な男女差があることを見出している。すなわち、男子は恋人と親友（異性、同性を含めて）を全く対極的なものとして捉えているのに対して、女子は恋人と異性の親友を対極的に捉えるものの、同性の親友はこれとは全く別次元で捉えているのである。水野（2000）は、その原因として、女子の友人関係は強い感情的つながりを基盤に構成されているために恋人の存在の影響を受けにくいことや、女子の方が、援助を受けられるより多くの種類の仲間を必要とするために、同性の親友には恋人以外の存在としての特殊な位置づけを与えている可能性があることを挙げている。このことから、女子における同性間の友人関係は、単なる友情とは異なる性質を有していることが考えられるということになるが、それが何ものであるかは水野（2000）は明示していない。また水野（2000）は、「ふだん（恋人や親友と）以下のようなことをどれくらいよくやりますか」というように、行動に関する質問が主となっているが、異性間の対人行動にはさまざまな社会的ルールの制約があるため、このような質問の仕方では異性への対人関係観（外見的な行動だけでなく、内面的な考え方や感情・欲求など）を十分に把握できないこともありうる指摘している。

そこで本研究では、基本的には水野（2000）を踏襲しつつ、恋人、異性親友、同性親友に対する感情的・欲求的レベルでの捉え方を調べるとともに、捉え方の背景にあるものは何であるかを検討することを目的とした。

方 法

被調査者 短期大学生および看護系専門学校学生に対し、下記質問紙への回答を依頼したところ、90名（男子35名、女子55名）がそれに応じた。

質問紙 調査にあたり、質問紙を作成した。なお、愛情や好意を測定する従来の尺度は調査時から20年近く前に作成されたため、とくに恋愛尺度については現代若年層の感覚とあまり合致しないことや、英語の翻訳のゆ

えに表現がこなれていないなどの問題点があったので、松井（1990）および Argyle & Henderson（1985、吉森編訳、1992）などを参考にしつつ、調査者の考えも盛り込みながら、恋人とよくする行動または恋人とよくある状態を表す 16 項目を選定した。表 1 に各項目を示す。

次に、1) 性別、2) 恋人の有無、3) 異性の親友の有無、4) 同性の親友の有無、をたずねる問、および 5) 先の 16 項目について、恋人（いない場合は、もしいるとすれば。以下同様）とどれくらいそうしたいと思うか（どれくらいよくやるかではなく、どれくらいしたいと思っているか。以下同様）、6) 異性の親友とどれくらいそうしたいと思うか、7) 同性の親友とどれくらいそうしたいと思うか、をたずねる問、などから構成される質問紙を作成した。なお、5) から 7) については、5 段階で回答できるようにした。

手続 き 授業時間の一部を利用し、被調査者に質問紙を配布し、趣旨説明をした後、調査への協力を求めた。なお、質問紙の回収に際しては、なるべく正直な回答を期するために、質問紙を持ち帰らせ、自宅等で回答するようにし、約 1 週間の期間を設けて、匿名で後日所定の提出場所に投函するように指示した。

表 1 質問項目の内容

-
1. 手をつなぎたい
 2. 喜びや悲しみを分かち合いたい
 3. 幸せにしてあげたい
 4. 2人でおしゃべりを楽しみたい
 5. 誕生日にプレゼントをあげたい
 6. 肩に手を回したい
 7. 部屋に呼びたい
 8. いつもピッタリと息があっていたい
 9. 1人で部屋に遊びに行きたい
 10. 悩みを打ち明けたい
 11. プレゼントをもらいたい
 12. 性的な関係を持ちたい
 13. 親切にしてくれたらお返しをしたい
 14. 悩み事の相談に乗りたい
 15. プライベートなことについて話し合いたい
 16. 2人で遊びに行きたい
-

結 果

各項目の代表値の算出 質問紙に回答した者（90名）のうち、恋人がいる者、異性の親友がいる者、同性の親友がいる者の度数は、男子はそれぞれ14名、18名、32名、女子は、22名、27名、54名であった。また、恋人、異性の親友、同性の親友ともいる者は男子で11名、女子では14名であった。そこで、このデータについて、恋人・異性の親友・同性の親友ごとに各項目の平均評定値を算出した。各項目の平均評定値を表2に示す。なお以後の分析では、

表2 各項目の平均評定値

項目	男子 (N = 11)			女子 (N = 14)		
	恋人	異性親友	同性親友	恋人	異性親友	同性親友
1	3.909	3.000	1.545	4.643	1.929	2.429
2	4.455	3.182	3.364	4.500	4.000	4.643
3	4.636	3.000	2.545	4.357	2.857	3.929
4	4.727	4.000	3.000	4.500	3.286	4.214
5	4.364	3.000	2.364	4.286	2.857	4.286
6	3.455	2.273	1.455	2.929	1.357	1.857
7	4.545	2.909	2.364	2.786	1.714	3.071
8	3.636	3.182	2.636	3.571	2.786	4.000
9	4.727	3.000	2.091	3.714	1.500	3.000
10	4.364	3.273	3.273	3.857	3.615	4.500
11	4.364	3.182	3.091	4.071	2.643	2.857
12	4.727	2.818	1.455	3.857	1.214	1.429
13	4.182	3.455	2.727	4.571	4.143	4.429
14	4.364	4.000	3.182	4.571	4.143	4.500
15	4.545	3.455	3.000	4.643	3.429	4.214
16	4.909	2.727	2.273	4.714	1.857	3.857

これらの値を各項目の代表値とした。

恋愛・友人関係の関係性について 各項目の代表値をもとに、男女別に、各者（恋人・異性親友・同性親友）間のDスコアを算出した。算出に際しては、たとえば恋人と異性親友間のDスコアを算出する場合、（恋人の間1の代表

値 - 異性親友の間 1 の代表値)² + (恋人の間 2 の代表値 - 異性親友の間 2 の代表値)² + … + (恋人の間 16 の代表値 - 異性親友の間 16 の代表値)² の平方根を求めた。

算出した値を非類似度の指標として、男女別に非計量 MDS を行った。2 次元解を採用したところ、初回の反復計算で Badness-Of-Fit Criterion が充分小さかった (男子: 6.60×10^{-13} 女子: 5.52×10^{-13})。各変数の布置を図 1 および図 2 に示す。図をみると、水野 (2000) とほぼ同様に、男子は異性親友がやや恋人寄りになっているものの、3 者は 1 次元上に布置されており、女子では、恋人 - 異性親友が 1 次元上に対極をなして布置されるのに対し、同性親友はそれらと別次元に布置されているのがわかる。このことから、恋人や異性親友、同性親友の捉え方は、行動レベルだけでなく、感情・欲求レベルにおいても、ほぼ同じ構造になっていることが看取されよう。

軸の解釈について 先にみたように、男子の恋愛・友人関係の捉え方は 1 次元性であるのに対し、女子のそれは、恋人 - 異性友人という軸と、それとは別に同性友人という軸が存在するようである。しかし、この結果だけではそれぞれの軸が何を意味するかが判然としない。そこで次に、これらの軸が、その背景にどのような要因を有していると考えられるかについて検討してみる。

まず、恋人・異性親友・同性親友ともいると答えた回答者 (男子 11 名、女子 14 名、計 25 名) のデータについて、16 の各質問項目の回答を込みにして (すなわち、各人の恋人、異性親友、同性親友ごとの回答を別々のデータ [25 人 \times 3 = 75 人分] とみなして)、因子分析 (主成分分解、ヴァリマックス回転) を行った。なお、因子の解釈可能性を考慮して、因子数を 2 に指定して分析を行った (累積寄与率 62.4%)。因子負荷行列等を表 3 に示す。

第 1 因子は、「性的な関係を持ちたい」、「1 人で部屋に遊びに行きたい」、「手をつなぎたい」などが高く負荷しており、「(性的要素を含んだ) 身体的接触に基づく親密性」の因子と解釈した。第 2 因子は、「悩み事の相談に乗りたい」、「プライベートなことについて話し合いたい」、「親切にしてくれたらお返しをしたい」などが高く負荷しており、「精神的支えに基づく親密性」の因子

表3 16項目の因子パターン

項目	Factor1	Factor2	h^2
12	.861	.017	.742
9	.812	.307	.754
1	.780	.143	.629
6	.770	.210	.637
3	.744	.271	.627
16	.737	.401	.704
7	.675	.278	.533
4	.657	.302	.523
11	.648	.045	.422
5	.590	.582	.687
14	.024	.828	.686
15	.295	.794	.718
13	.131	.783	.630
10	.102	.782	.622
2	.340	.679	.576
8	.283	.638	.487
寄与	5.665	4.311	

註：ゴシック太字：因子負荷量 .60 以上

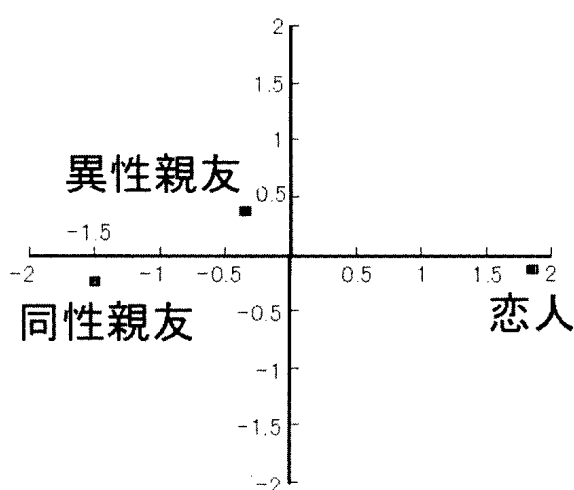


図1 恋人、親友の布置 (男子)

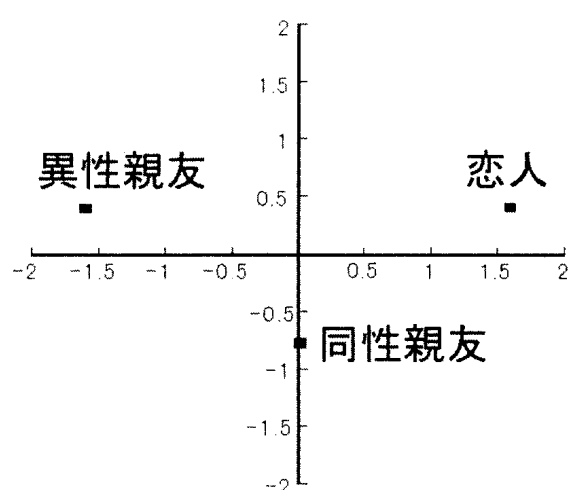


図2 恋人、親友の布置 (女子)

と解釈した。なお、男女別に同様の因子分析（主成分解、ヴァリマックス回転、2因子指定）を行ったが、累積寄与率、因子パターンはほぼ同じであった。

次に、各因子の因子得点を説明変数、各者（恋人・異性親友・同性親友）を基準変数として正準判別分析を男女別に行ったところ、男子は第1正準相関のみが有意であった（ $p < .001$ ）。一方女子は、第1、第2正準相関とも有意であった（第1正準相関： $p < .001$ 、第2正準相関： $p < .05$ ）。なお、標準化判別係数及び判別関数のグループ平均値を表4に示す。

表4 標準化判別係数及び判別係数のグループ平均値

	男 子		女 子	
	第1軸	第2軸	第1軸	第2軸
身体的接触に基づく親密性	1.148	-.644	1.538	-.164
精神的支えに基づく親密性	.612	.918	.394	1.005
恋人	1.401	.006	1.420	-.243
異性親友	-.277	-.018	-1.517	-.249
同性親友	-1.124	.012	-.011	.475

表4をみると、まず男子の第1軸は、身体的接触に基づく親密性が正の方向に大きく、それよりやや小さいものの、精神的支えに基づく親密性も正の方向に大きくなっている。また、恋人が正に、同性親友が負にそれぞれ大きくなっている。このことは、男子においては、恋人を性的対象と見ながらも、精神的な支えをも求める存在としても捉えており、同性の親友は性的な対象でも、精神的な支えを求める存在でもないといえるであろう。また、異性親友はその中間的存在とみることができるとであろう。また、この軸は先のMDSの結果における横軸に相当するものであろう。

一方女子は、第1軸は、身体的接触に基づく親密性が正の方向に大きく、また恋人が正に、異性親友が負にそれぞれ大きくなっている。このことは、恋人と異性の親友を峻別する際に、身体接触に対する許容－非許容が重要なポイントであることを示していると考えられよう。この軸はまた、先のMDSの結果における横軸に相当すると考えられよう。一方の第2軸は、精

神的支えに基づく親密性が正の方向に大きく、また同性親友が正になっている。このことは、女子において同性の親友は、恋人以上に精神的な支えとなる存在であり、情緒的なつながりが深いものと推察される。またこの軸はMDSにおける縦軸に相当すると考えられよう。

考 察

今回の結果から、友人関係ならびに恋愛関係は、行動レベルだけでなく、感情・欲求レベルにおいても、男子は「恋人対同性親友（中間に異性親友）」という1次元的な捉え方を、女子は「恋人対異性の親友」という捉え方と、それとは独立した「同性の親友」という捉え方をしていることが明らかとなった。水野（2000）が指摘しているとおり、行動レベルでの調査では、社会的ルールの制約を受けるために、その結果としてこのような次元が現れた可能性も考えられるが、今回のように、感情・欲求レベルについての調査で、しかも回答者の匿名性を高める配慮をした上で、水野（2000）と同様の結果が得られたことは、男女それぞれの対人関係観をより明確にしたといえるであろう。ところで、水野（2000）では、男子において異性親友は同性親友に近い存在として位置づけられていたが、今回はむしろ恋人寄りになっている。今回の研究とは、質問項目等の面で違いがあるために一概には言えないであろうが、感情・欲求レベルの調査を行ったことにより、異性親友を恋人寄りに位置づけることが可能になったと考えることもできよう。

また、女子については、「恋人対異性の親友」という次元の背景にあるものと「同性の親友」の背景にあるものについて興味深い結果が得られた。あくまでも、恋人、異性親友、同性親友の関係性をどう捉えるかという枠組みの中ではあるが、恋人と異性の親友を峻別するものは、性的要素を含んだ身体的接触に基づく親密性であり、女子にとって、それを許容できる存在が恋人、許容できない存在が異性の親友であるといえよう。このことは、前出のDavis（1985）やSternberg（1988）において情熱（ここに性的衝動等が含まれる）が友情と恋愛とを区別する主要素のひとつにあげていることとも合

致しているであろう。

ところで、女子においては、同性親友は精神的支えと結びついていることが示されたが、たしかに表2をみると、「いつもピッタリと息が合っていたい」や「悩みを打ち明けたい」では、恋人よりも値が高くなっている。やはり、女子同士の友人関係は、情緒的結びつきを基盤とした相手との信頼関係から形成されているといえるであろう。それゆえに、松井ら（1990）の研究において、女子の恋愛が男子よりもルダスやプラグマ的な要素が強いことも理解できるであろう。すなわち、女子にとっては自分の心の支えとなる存在として同性の友人がいるため、恋人のことをそれほど精神的な支えの対象とする必要はないと考えられる。見方を変えると、女子の場合、信頼できる同性の友人がいるかないかで、その恋愛観が大きく変化する可能性があるかもしれない（たとえば、あくまでもひとつの可能性であるが、悩み事を相談できる親しい同性の友人に恵まれていない女性は、それができる対象を異性に求めてしまうことになり、結果的にいわゆる「つくすタイプ」になりやすい、など）。この点について、今後の研究が待たれるところであろう。

ところで、今回の研究にはいくつかの問題点を指摘しなければならない。まず、データ数の問題が挙げられる。今回分析対象としたデータ数はあまりにも少なく（男子11名、女子14名）、これらの平均値を代表値としたことには問題もあるであろうし、多変量分析を行うにあたって必ずしも十分な数であるとは言い難い。今後はより多くのデータをもとに検討していく必要がある。さらに、今回、因子分析や正準判別分析によって得られた軸が、MDSのそれに対応しているかどうか、その妥当性の検証が不十分であることは否めない。この点についても慎重に考慮したうえで、結果を解釈する必要があるであろう。

引用文献

Argyle, M. & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships*. London: Penguin.

（アーガイル，M・ヘンダーソン，M（著） 吉森 護（編訳） 1992 人

間関係のルールとスキル 北大路書房)

- Berndt, T. J. 1981 Relations between social cognition, nonsocial cognition, and social behavior: the case of friendship. In J. H. Flavell & L. Ross (Eds), *Social cognitive development: Frontiers and possible futures*. Cambridge University Press.
- Berscheid, E. & Walster, E. 1974 A little bit about love. In T. L. Huston (Ed.), *Foundations of interpersonal attraction*. Academic Press, 355-381.
- Davis, K. E. 1985 Near and Dear: Friendship and love compared. *Psychology Today*, **19**, 22-30.
- Dutton, D. G. & Aron, A. P. 1974 Some evidence for heightened sexual attraction under conditions of high anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 510-517.
- Eder, K. & Hallinan, M. T. 1978 Sex differences in children's friendships. *American Sociological Review*, **43**, 237-250.
- Karweit, N. & Hansell, S. 1983 Sex differences in adolescent relationships: Friendships and status. In J. L. Epstein & N. Karweit (Eds.), *Friends in school*. Academic Press.
- 楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動、学級雰囲気、学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.
- Lee, J. A. 1977 A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **3**, 173-182.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, **33**, 355-370.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 立川短大紀要, **23**, 13-23.
- 水野邦夫 2000 恋愛関係および友人関係の捉え方における性差について 聖泉論叢, **8**, 59-71.
- Rubin, A., Hill, C. T., Peplau, L. A., & Dunke-Schetter, C. 1980 Self-disclosure in dating couples: Sex role and the ethic of openness. *Journal of Marriage and the*

Family, **42**, 305-317.

Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 265-273.

Sternberg, R. J. 1988 Triangulating love. In R. J. Sternberg & M. L. Barnes (Eds.), *The Psychology of Love*. Yale University Press, 119-138.